

---

# ペール・アフェア

壇 敬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペール・アフエア

### 【Nコード】

N2113D

### 【作者名】

壇 敬

### 【あらすじ】

高校生の英理子と正裕が、塾で出会いデートをし、その中での誤解や嫉妬を、プラトニツクな風景で書きました。

## 片思い

前から2列目の右から3番目。

そこが、いつも彼女が座る席。

少し長めのボブカットで、目がクリツとした小顔の少女だ。

左斜め後ろの彼女の顔が見える、少し離れた位置に僕は座る。

僕はいつも彼女をチラ見しながら、塾の授業を聞いている。

それが塾に行った時の、僕の行動だ。

もう半年も続けている。

決して勉強が手に付かないことはない。

そのせいで成績が落ちたことはない。

それどころか、若干上がっている程だ。

彼女とは同じ学年だが、学校は違う。

そのせいか、学校での僕は塾とは違ってごく普通だと思う。

友達と何の屈託もなくふざけるし、何の照れもなく女子とも普通に話す。

だけど、塾の彼女に対してはそうできない。

「これが『片思い』ってやつか」

そう割り切り始めた頃に、何かが動き始めた。

塾のテスト結果が張り出されて、それを見ていた時のことだった。

発表を見ていた僕に彼女がぶつかって来たのだ。

彼女は友達と話をしながら歩いていたようで、前を見ていなかった

のだ。

もつとも、廊下の真ん中に突っ立っていた僕も悪いのだが。

「ごめん。大丈夫？」

その時、僕はまだ、それが彼女だとは気付いていなかった。

「こちらこそ、ごめんなさい」

そう言っただけで顔が上がった。

僕と彼女の視線が出会った。

「あー！」

とても短い感嘆をお互いに投げ掛けた。

彼女は慌てて散らばった、ふたり分の教科書やノートをかき集め始めた。

ぼくも、遅れてその行動をとった。

お互いに慌てて持ち物を確かめつつ、その場を立ち去った。

一度だけだった、目が合ったのは。

それ以上、彼女を見ることが出来なかった。

家に帰ってから、思い出すたびにドキドキする。

溜息をつきながら、教科書とノートを片付け始めた。

「おや？」

1冊だけ、見慣れないノートがある。

その代わりに、僕の数学のノートが1冊ない。  
あの時、すれ違ってしまったのだ。

そのノートは国語だった。

そして「寺井英理子」と記してあった。

「て・ら・い・え・り・こ……さんかあ」

その時、塾のテスト結果を思い出した。

同率順位の子だ！

僕と同じ32位、おまけに32位はふたりだけ。

「全くの『偶然』さ！」

そう思いながらも、何かを感じている僕だった。

翌日、ノートを返そうと教室に入ったが、前から2列目の右から3番目に彼女の姿はまだなかった。

「いつもなら、僕が来る頃には席に就いているのに」

そう思いながら席に就くと、後ろから声がした。

「あの〜」

聞き覚えのある声だった。

僕は、声が裏返りながら答えた。

「はい？」

彼女は少し微笑んだ。

「このノート、お返しします」

「昨日、ぶつかった時にすり替わったみたい」

そう言つて、ノートを差し出した。

僕も慌てて、カバンからノートを取り出した。

「僕も、昨日気付いて。これ、返します」

お互いにノートを交換した。

そして彼女がゆっくり立ち去ろうとした時に、僕は彼女に声を掛けた。

「あ、あの！ 寺井さん！！」

彼女は振り返り、僕の顔を見て言った。

「なあに、里中くん？」

自分の名前を呼ばれたことにも気付かず、昨日考えていたセリフをなるべく流暢に話した。

「こうなったのも、僕が悪いのだから…。えっと、授業が終わった後に、玄関で待っててくれない？」

僕は必死だった。

自分が何を言っているのか、訳が分からなくなっていた。彼女は満更でもない顔で、躊躇なくこう答えた。

「いいわよ」

そう言くと彼女は走り去った。  
季節は暑くなりかけていた。

## 片思い（後書き）

プラトニックな恋愛を書いてみました。  
よろしければ、感想などをお願いします。



## 告白

これが2回目のデートだった。

思ったよりも早く、待ち合わせ場所に着いた。

少し待とうと、植え込みの石垣に腰を下ろそうとしたその時、不意に肩を叩かれた。

ビクツとして振り向くと、英理子が微笑んで手を振った。

「おはよ」

ウエストにリボンが付いたベージュのフレアスカート、ペールブルーのノースリーブに白のVネックカーディガンを羽織った、英理子がそこにいた。

「お、おは、よう、ございます」

僕はいつもシドロモドロだ。

そんな僕を見て、いつも彼女は笑う。

「うふふ…」

グリーンボーダーのポロシャツにウォッシュジーンズにデッキシューズ、それが僕の服装。

「格好、おかしいかな？」

彼女は優しく笑って答えた。

「うっん、そんなことないよ。正裕らしくていいわ」

そんな言葉に僕はちよつと照れた。

電車に乗って海に向かう。

日曜日の電車はさすがに空いている。

ボックスシートに座ったが、向き合つてではなく横に並んで座った。どうして、こうなっちゃうのかな。

電車の中でも、初めは勉強の話だった。

だけど、そのうちに話題も好きな音楽やアーティストの話に変わった。

電車を降りて、海岸に向かう。

初夏の日差しを受けて、海はその日差しを熱く照り返していた。並んで砂地を歩いていた。

「きゃ！」

英理子は、砂に足をとられて倒れそうになった。

すかさず彼女の手を取って支えた。

よろけた拍子に僕に寄りかかってきた。

はつとした彼女は、慌てて体勢を立て直して、つないだ手を放した。

「大丈夫よ」

彼女は視線を外してそう言った。

波打ち際に来た時、彼女はパンプスを脱いで両の手に持ち、波と追

いかけっこを始めた。

僕も靴を脱いで、彼女と一緒に追いかけてっこを始めた。  
波と戯れて、ズボンとスカートの裾がすっかりぬれしてしまった。  
しばらく波打ち際を歩いて乾かした。

その時、英理子は自然に手をつないできた。

僕は少しビックリして彼女の方を向いた。

彼女はしつかりと僕の顔を見ていた。

僕は少しだけ強く手を握った。

英理子は腕を絡ませて、彼女は頭を僕の肩に預けた。

そして、つぶやくように言った。

「知ってたのよ、ずーっと見られているって」

僕はドキッとした。

「最初はストーカーだと思ってた。でも、正裕、何にもしないのよね」

「そのうちに、友達が調べてくれて」

僕は「え？」と思った。

「真里ちゃん、知ってるでしょ？」

僕と同じ学校の、しかもクラスメートだ。  
おまけに世話焼きな奴なんだ、これが。

「真里ちゃんがいろいろ教えてくれたんだ」

僕は「あんにやろー」と思った。

真里つぺの奴、おくびにも出さなかったぞ。

「話を聞いているうちに思ったの。どんな人か、確かめたいって」

英理子は立ち止まった。

そして、僕の顔を見た。

「ぶつかったの、わざとなの。ごめんなさい、試すようなマネをして」

それから、英理子はまた歩き出した。

「でもよかったあ。だって、こんなにいい人なんだもん」

英理子は急に駆け出して、10m進んだところで振り返った。

「好きよ、とっても好き」

そう言うと、振り返ってまた走り出した。

僕も英理子を追っかけて、全力で走り出した。

そして彼女の腕を捕まえた。

「僕は、英理子を放さないよ」

そう言うと、彼女はうなずいてくれた。

「ずっと、この手を放さないで」

暑い夏の日差しが、1つになった二人の影をさらに色濃くしていた。

## 誤解・上

学校で、真里ツペに呼び出された。

真里っぺは、声を低めてヒソヒソと話した。

「英理子ちゃんとは上手くいってんの？」

僕は嫌そうに答えた。

「何だよ、真里っぺには関係ないじゃん」

真里っぺは、更に声をひそめた。

「ところが、そうはいかないのよ」

そう言って真里っぺは頭を抱えた。

真里っぺの奴は、昔から世話好きだ。

安請合いするから、どつぽにはまったんだ。

「里中クン、君ねえ、ちょっとモテ過ぎ。世の中の女は、どーしてこんな男がいいのか」

僕はちょっとムツとした。

「何なんだよ、黙って聞いていれば！ 悪態を付くなら本人の居ない所でやれよ」

真里っぺはなだめるように手で押さえた。

「まあ、まあ。落ち着いてよ。それでえ、英理子ちゃんはどうなの？」

急に切り返されて、僕は照れて言ってしまった。

「あ、ああ、上手くいつてるさ」

真里っぺは、再び頭を抱えた。

そして、ハッと顔を上げて言った。

「ね、一回だけ会って欲しい女の子がいるの」

「それで、断ってくれればいいわ」

「そう、それがいい。そうしましょ」

「土曜日の10時、駅前で待ち合わせよ」

「いい？ 忘れないでね！ 必ずよ」

そう言い放つと、さっさと駆け出していった。

「ちょ、まつ、て…って」

いつも強引なのだ、真里っぺは。

だけど、大体の話は読めた。

要するに僕を好きな女の子がいて、真里っぺに紹介を頼んだのだらう。

ところが、僕には英理子がいる。

真里っぺは、まさか英理子と付き合うとは思っていなかったのだ。

それに、僕と英理子のが分かる前にそのことを請け負っていたのだらう。

仕方がない。

真里っぺは幼馴染だし、彼女の顔を立ててやろう。

英理子とのつながりも、真里っぺのお陰でもあるのだから。

土曜日、駅前で待っていると、1人の女の子が声を掛けてきた。

「あの、里中くん」

僕はビックリした。学校でNo.1、才色兼備の山野加奈子だった。

「ごめんなさい、呼び出して」

僕はちょっとシドロモドロになった。

「真里ちゃんから聞きました、お付き合いしている人がいるって」  
「でも、一度だけ…」

ずっとうつむいて話していた彼女が、顔を上げて、僕を見つめた。

「今日一日だけ、私に付き合って」  
「お願い」

そう言っただけで彼女は深々と頭を下げた。  
僕は慌てて、彼女に言った。

「あ、あ、頭を上げてよ」  
「まいったな、分かった、分かったよ」

「今日一日だけだぜ」

彼女は頭を上げた。

そして、晴れ晴れとした笑顔を僕に向けて言った。

「ありがとう」



## 誤解・中

デートなど、まるで考えていなかった。

僕はその場で断るつもりだったからだ。

しかし、加奈子の「今日だけ」戦略にまんまとはまってしまった。  
わざとウンウン言っただけで悩んでいたら、加奈子が微笑んで言った。

「映画は？」

やはり、定番の映画館か。

「それでいい？」

僕は加奈子に聞いた。

加奈子は、微笑を崩さずにうなずいた。

電車に乗り込んで、映画館に向かう。

車内は混んでいた。

僕は、扉近くの吊革につかまった。

加奈子は、近くに座席のポールがあるのに、僕の腕につかまった。

僕は、こんな積極的な山野加奈子を見たことがなかった。

確かに目立つ彼女であったが、生徒会やクラブなどで活発に活動している訳ではない。

それだけに意外な印象だった。

映画は、今流行の魔法使いのやつだ。

彼女は既に前売券を買っていた。  
ポップコーンとコーラを買って、シートに座る。もちろん、並んだ。

別々に座る訳にはいかないだろう。  
ちよつとビツクリしたり、怖いシーンだと、僕の腕にしがみついてくる。

加奈子の過敏な反応にわざとらしさを感じてしまつたのであった。  
映画館を出た加奈子は饒舌になっていた。

「私、この映画、見たかつたの」

「正裕クンと一緒に見れて良かった」

「正裕クンはどうだった？」

僕はちよつとたじろいだ。

「…うん。面白かつたよ」

実を言うと2回目なのだ、この映画を見るのは。  
先週、英理子と見たのだ。

そして、遅めの昼食をとろうとした時だった。  
加奈子が僕の手を引いて言った。

「私、食べたいものがあるの」

僕を引っ張って、あるレストランに連れて来た。  
そこは有名なイタリア料理の店だった。

「ここ、美味しいのよ」

「家族でよく来るの」

「今日はパパに予約してもらったの」

加奈子はますます饒舌になった。そして、会話は加奈子が中心だった。

僕の口からは「うん」と「そうだね」の、たつたふたつの言葉が出てくるだけだった。

僕は加奈子のペースにはめられていた。自分は、只の人形のように思えた。

食事モデザートを終えた頃に、加奈子は切り出してきた。

「お願いがあるの」

「聞いてもらえないかな？」

僕はナプキンで口を拭きながら、彼女を上目遣いで見た。

「なんだい？」

加奈子は胸の前で手を組んで、祈るようにして、僕に言った。

「今日の記念にプレゼントが欲しいの」

「正裕クンから何か贈って欲しいの」

「ダメかな？」

これで最後かと思った。だから、仕方がないかと思った。

「ああ、いいよ」

加奈子は飛切りの笑顔で喜んだ。

「嬉しい！」

「やっぱり、正裕くんね」

店を出てしばらく歩いた。

その間、加奈子は僕の腕を離さなかった。

女子の間ではかなりな人気のファンシーショップに入ろうとした時、僕は凍り付いた。

ちょうど、2、3人の女子が出てきた。

その1人が「英理子」だったのだ！

英理子は僕を見た。

「え？ 正裕？」

その瞬間に何かを悟った顔をして、英理子は、僕とは反対方向に走り去った。

## 誤解・下

「え？ 正裕？」

その瞬間に何かを悟った顔をして、英理子は、僕とは反対方向に走り去った。

僕は加奈子の手を振り払った。

「悪リイ」

僕は加奈子を見ないで吐き捨てるように、そう言って走り出した。加奈子の手は、硬く握り締められていた。

僕は英理子を追った。

追いついて英理子の腕を取った。

だが、英理子は振り払って走り続けた。

英理子の速度が段々落ちて、歩きに変わった。

僕は英理子の後に付いて歩いた。

英理子はしゃくり上げていた。

やがて、英理子は立ち止まった。

泣いているようだった。

泣いたまま立ち尽くしていた。

僕は、その後ろで立ち尽くしていた。

英理子と同じように。

「ごめん。でも、そんなんじゃないんだ」

僕は言葉にしたが、その言葉は僕自身にも言い訳にしか聞こえなかった。

また、英理子は走り出した。

最寄の駅で電車に乗って、通い慣れた駅に着いた。そこから、10分もしない所に英理子の家がある。

英理子は一度も振り向かず、何の言葉も発せず、そして家の中に消えていった。

…僕はどうすることも出来なかった。

携帯電話で連絡をした。

「電波の届かない所に居られるか、電源が…」  
僕は電話を切った。

メールをしても同じだと思ったが、僕はすぎるものが欲しくて送信した。

『ごめん』

それ以上の文字を打ち込めなかった。

余程、落ち込みがひどかったのだろう、学校でクラスの皆が声を掛けてくれた。

だが、気のない生返事しか出来なかった。

「ごめん、ホントーにごめん！」

真里っぺが、頭を下げて手を合わせて話し掛けてきた。

「……」

僕は溜息しか出なかった。

どうしたらいい？と真里っぺが聞いてきたが、僕は何もしてない  
いと答えた。

真里っぺにも罪の意識があるのだろう。だけど、同意したのはこの  
僕だ。

僕が、不注意で不用意だったのだ。

だから、不貞で不謹慎な行為ととられても仕方のないことだ。

塾へ行っても教室に英理子がないか、僕が教室に入ると英理子が  
出て行ってしまう。

英理子に何度、連絡してもつながらないし、メールの返信もない。

お手上げだった。

何もする気になれなかった。

何にも興味が持てなかった。

勉強にも部活にも何もかもに身が入らなかった。

学校の帰り道、僕は何を考えていたのだろう。

いや、何も考えていなかったのだ。

赤信号の横断歩道にフラッと歩み出てしまった。

そこへクラクションを鳴らした車が！

僕が気が付いた時には、もう……。

英理子が不思議に思っ て真里っぺに聞いた。

「真里ちゃん、里中くん、どうかしたの？」

「最近、全然見かけないんだけど」

そこで真里っぺはビックリした。

「英理子ちゃん、知らなかったの?!」

「里っち、交通事故に遭ったのよ!」

英理子は、ハアハア言いながら病室の前にいた。  
病室の名札には「里中正裕」と書いてあった。

英理子はノックした。

「はい、どうぞ」

男の声がした。正裕の声だ。

英理子は、扉を開けて中に入った。  
彼の痛々しい姿がそこにあった。

「英理子…」

正裕は口をポカンと開けていた。

その時、正裕の母親が入ってきた。



「おや、お友達？」

英理子は挨拶した。

「はじまして、寺井英理子と言います」

母親はいかにもって感じで話を捌く。

「はじめまして」

「お前にもこんな友達がいるんだ」

正裕が恥ずかしそうに母親に話した。

「いつもの話の、彼女だよ」

母親は「え？」という表情をしたが、話の切り替えが上手かった。

「へー、この娘が？」

「可愛いお嬢さんだねえ」

「お前も、なかなかやるもんだね」

「ちよつとは見直したよ」

「このバカ息子の何処がいいんだか……」

「あ、ごめんね。変なつもりじゃないから」

「うちのバカ息子をよろしく願いしますね」

正裕はうんざりして言った。

「母さんはうるさいんだよ！」

母親は潮時をよく知っていた。

「はいはい、お邪魔虫ね」

「ちよっと出掛けるからね」

「ごゆっくりどうぞ、ね」

そう言うと、母親はそそくさと出て行った。

英理子はベッドに近づいていった。

「大丈夫？」

正裕は真顔で答えた。

「左足の骨折と右肩の脱臼、後は打撲。命には別状ないよ」

英理子は、ホッと安堵して表情を緩めた。

「よかったあ」

だが、正裕は逆に真剣な顔になった。

「英理子、この前のことはごめん」

「僕にはそれしか言えないんだ」

すると、英理子の表情は優しくなった。

「うっん、もういいの」

「真里ちゃんから全部聞き出したわ」

英理子は、キツとした顔で言った。

「でも、どうして事故ったって連絡をくれないの！」

正裕は少しだけ表情を柔らかくした。

「だって、携帯がつからなかったから」

英理子はハツとして、携帯を取り出した。  
ずーっと電源を切ったままだった。

英理子は、携帯の電源を入れた。  
するとメール着信の嵐だった。

「ごめん」というメールと「好きだ」というメールが、たくさん流れ込んできた。

英理子の頬に、涙が流れた。  
そして、笑いながら言った。

「バカね」

正裕も笑いながらこう言った。

「バカです」

正裕と英理子は目を合わせて笑った。

病室の窓からは、優しい風が流れてきた。  
ほんのり恋の香りがする風が。

## 番外・嫉妬

「真里ちゃん、どうだった？」

私は、戻ってきた真里に聞いた。

「OKよ。約束は取り付けたわ」

ホッとした私に、真里はこう付け加えた。

「だけど、彼には付き合っている娘がいるの」  
「それだけは分かっててよ、お願いだから」

私にとって、そんなことはどうでもいいの。  
里中クンとデートが出来れば、それでよかったのよ。

私は、早速プランを考え始めた。

「遊園地がいいかしら？」  
「でも、絶叫マシンは乗れないし」  
「美術館って、楽しくないわよね」  
「やっぱり映画よね、最初は」

「お昼はあそこがいいわ」  
「あのイタリア料理なら里中クンも喜ぶわ」  
「あそこだったら、ちよつとは融通が利くし」  
「パパに頼んでもらおうつと」

「それから、どうしよう？」

私は有頂天だった。

土曜日が待ち遠しくて仕方がなかった。

里中クン、私を見てビクリしていた。  
相手が私だとは知らなかったみたい。

真里もなかなかやってくれるわね。

だから、最初から私のペースだったわ。  
全てが順調だった、あの店の前までは。

「悪リイ」

里中クンはそう言っつて、私を置き去りにした。  
私は憶えず、拳を握り締めていたわ。

私は遣る瀬なかった。  
悲しいより、悔しかった。

その時の私は、何もかも許せなくなっていた。

私は、里中クンをストーキングして、里中クンと彼女のデートを追いかけたの。

ふたりは、楽しそうに電車に乗っていたわ。  
ふたりの会話の息が、私のそれとは違う。

二人が向かったのは、美術館だった。  
美術館でデートをするなんて、私には楽しいこととは思えなかった

わ。

でも、ふたりは一枚の絵画の前で、あーでもない、こーでもないと楽しそうに議論している。

私には信じられない光景だったわ。

そして、ふたりは屋台でクレープを買って、1つをふたりで食べていたわ。

それに、たこ焼きを食べ、コーラを飲んだ。

それも1つずつだったの。

そばにいて、彼女の手から食べていたのよ。

それから、本屋で参考書と文庫を物色していた。

彼女の方がよく知っているようで、里中クンはうなずきながら本を選んでいたわ。

ふたりは帰りの電車に乗った。

ふたりとも疲れた表情は見せずに、朝の電車の時と同じく楽しそうにしていた。

私、今日一日で何かを悟ったわ。

里中クンには、私でなく彼女なのだと。

彼は、彼女という時の笑顔を、私とデートした時には一度も見せなかった。

一瞬たりともなかったのよ。

考えてみればそう。

終始、私がずっと話をしていて、彼は返事をするだけ。  
微笑む時間さえ、彼には無かったもの。

私は最後まで自分のプライドを捨てられなかった。  
可愛い女になることが出来なかったのよ。

里中くんが彼女を家まで送っていった帰りに、偶然に会ったかのよう  
うに声を掛けた。

「あら、里中くんじゃない？　こんばんは」

里中くんは、ビックリしていた。

「あれ？　山野さん？」

「どうしたの、こんなところで？」

私は、アンニユイに話した。

「私の負けよ」

そう言つて、私はタクシーに乗り込んだ。

彼がズボンのポケットに手をつ込み、苦笑いをして改札口に入っ  
ていったのを、私はタクシーの窓から見ていた。

「さよなら、私の初恋」

加奈子は、小さくつぶやいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2113d/>

---

ペール・アフェア

2010年10月9日02時43分発行